研究 No. 8815

住宅総合研究財団
研究年報No.16 1989

貴州トン族の高床住居と集落構成に関する調査と研究(1)
(梗概)

貴州トン族住居調査委員会
代表　田中　淡

1．はじめに

1－1．研究の視野

(1) 中国の高床住居

ドイツの民族学者，J．レーマンが高床式家屋の世界的分布を示したのは，今世紀初頭のことである［Lehmann 1904］。以来，高床家屋の問題は，さまざまな分野の注目をあつめてきた。

レーマンが示したように，たしかに高床の家屋形式は全世界的にみとめられるが，それがもっとも集中する地域は，華南および東南アジアとその周辺地帯である。初期のハイネ＝ゲルデルンは，東南アジアの高床住居が独自に発生したものか，それともシベリア・西アジア・ヨーロッパの高床家屋と発生的に系譜関係をもつかどうかは問題であると述べ［Heine＝Geldern 1923］，のちに東南アジア・オセアニア地域に高床家屋をもたらした担い手をオーストロネシア語族であろうと推定した［Heine＝Geldern 1932］。しかしながら，大林太良が1度はハイネ＝ゲルデルンの仮説に賛同しつつ［大林 1975］，その後撤回したように［大林 1984］，いまではオーストロネシア語族の基層文化と高床家屋を結びつけて考える研究者は，近森正［1984］などを例外として，あまり多くない。

近年では，中国における発掘の成果に基づいて，東アジア・東南アジアにおける高床家屋の起源地を，新石器時代の華南のどこかに想定する見方が有力になってきている。中国における高床（干闌）式住居については，関係する漢籍資料を渉猟し，また民族誌資料をも積極的に活用した戴裔煊の先駆的研究がある［戴 1984］。戴は，東南アジアの高床住居起源地を，華中・華南を包含した「東南アジア沿海部」に想定しつつ，先史欧州の「湖居」との間接的な系譜関係にまで考察をひろげている。

一方，安志敏は，考古学的側面から高床住居の関係遺構・画像資料を集成して，漢文明被覆以前の揚子江流域以南には，きわめて広範囲に高床家屋が分布していたことを論証し，従来の新石器時代に対するイメージを覆した［安 1963］。以後も，浙江河姆渡，福建崇安城，広東茅崗などで続々と高床の遺構が発掘され，高床家屋の起源地としての先史華南のイメージは，さらに強烈になりつつある。

ところで，民族誌的に高床家屋の分布地域を見わたすと，かつてハイネ＝ゲルデルンが試みたように，それをある特定の民族もしくは語族に結びつける発想は，ほとんど不可能であることに気がつく。つまり，高床家屋の諸問題は，民族や語族を超越した，さらに大きな文化複合の枠組みのなかで解釈されるべきなのであろう。そして，その鍵をにぎるのが「稲作」であるのは，おそらくまちがいない。ただ，初期の高床住居については，発掘遺構の出土地点や文献の記載から，古代百越との相関性を指摘する研究者が少なくない［林 1982；潘 1987］。

百越とは，先秦時代の揚子江流域以南に蟠踞した非漢系の土着民族であり，呉越・于越・山越・甌越・閩越・南越・駱越などの多彩な地方集団が存在した。近年，活発になり始めた百越史研究によれば［百越民族史研究会（編）1982；朱俊明（主編）1987；蒋・呉・辛（編）1988；陳・蒋・呉・辛 1988］，断続的な漢民族の圧迫によって南下を強いられた現在の西南少数民族（の一部）こそが，百越の子孫たちにほかならないという。とりわけ，文献にみえる断髪文身・抜歯・船棺・漁労・稲作・高床住居などを構成要素とする百越の文化は，壮侗（チワン・トン）語族との共通項が多く，両者には言語的な類似性も認められる。以上の点から，百越≒壮侗語族を，初期の（すなわち本来の）高床住居の担い手とみることに，さほど無理はないように思われる。すでに周達生［1986］も整理したように，現在では壮侗語族以外の民族にも高床住居が共有されている。しかし，本来の高床住居の担い手（おもに壮侗語族）と，その影響のもとに高床が波及したであろう蔵緬（チベット・ビルマ）語族や苗瑤（ミャオ・ヤオ）語族などとは，一線を画する必要があるだろう。

本研究が対象とする貴州のトン（侗）族は，雲南のタイ（傣）族，海南島のリー（黎）族，広西のチワン（壮）族などとともに，壮侗語族を構成する代表的な民族である。『侗族簡史』［《侗族簡史》編写組 1985］によれば，gaeml，geml，jeml などのトン族の自称と，『宋史』「西南渓洞諸蛮」や『老学菴筆記』巻4にみえる民族名称「犵

伶」とには，音声の面で親近性があるという。また，『晃州庁志』には「庁治 東のかた龍標に接し，西のかた駱越に馳す」とみえ，貴州省の黔東南苗族侗族自治州の北部に「駱越」の居住地があったことを推定できる。つまり，トン族は，百越の地方集団である駱越の一支に，その族源を求めうるのである。

以上のように，トン族は，高床住居本来の担い手とみなされる百越の末裔であるにもかかわらず，その高床住居についての研究は，これまでほとんどなされていない。壮侗語族の高床住居については，雲南タイ族，広西チワン族などに限定されて，研究が進められてきたに過ぎないのである。したがって，本研究は，トン族の高床住居と集落に関する，初の本格的な調査と考察を試みたものといえるであろう。

(2) 多民族地域における住居形式

いま述べたように，本研究はトン族の高床住居を，おもな対象としている。しかし，調査地区である貴州省の黔東南苗族侗族自治州には，トン族以外にも多数の民族が居住している。1983年の統計によれば[《黔東南苗族侗族自治州概況》編写組 1986]，自治州の総人口は3,312,368人で，そのうちミャオ（苗）族が37.2%，漢族が32.5%，トン族が24.7%，プイ（布衣），スイ（水），チワン（壮），ヤオ（瑤），イ（彝）など合わせて26の少数民族が6.0%を占めている。

このような多数の民族が混住する地域では，民族相互の文化交流が，多かれ少なかれ進展する。文化の相互浸透がモノと社会の両側面で進行し，いくつかの文化項目は，複数の民族に共有されるようになるのである。ところが，その反面で，他民族とは異なった自らのアイデンティティへのこだわりも，一層強くなる。この相矛盾するベクトルの共存は，「文化の受容とエスニシティ（ethnicity）の維持」という，文化人類学の重要なテーマ[綾部（編） 1985]に直接つながるものといえるだろう。そして，もっとも興味深いのは，住居という物質文化の1レベルにおいても，民族相互の重層性とともに，各民族の固有性がはっきりと認められることである。

本研究のより大きな視野のなかには，このエスニシティ問題と関連した，「多民族地域における物質文化の固有性と重層性」の解明というテーマが包含されている。本稿の結論においても，たんにトン族の高床住居の特質を整理するというような作業以上に，トン族・ミャオ族・プイ族・漢族の住居を比較することによって，物質文化における民族相互の重層性と各民族の固有性を抽出することに力点がおかれるだろう。

1－2．調査の概要

1988年度の調査は，今後継続的になされるであろう集中的な調査に対して，その予備的な役割を担うものである。このため，黔東南苗族侗族自治州を広域的に踏査し，

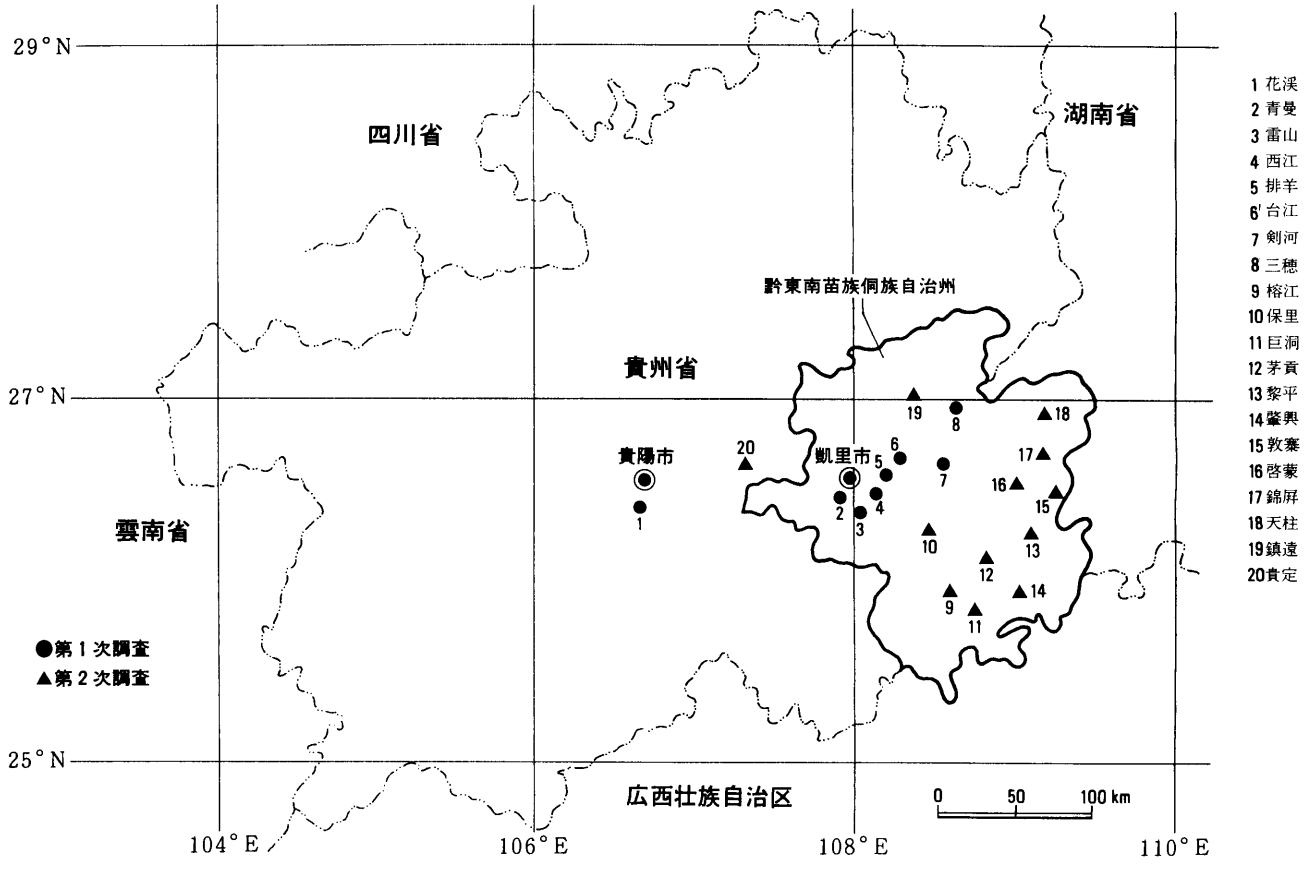

図1　調査地の位置

表1　調査家屋一覧

No.	調査日	調　査　地	戸　主	民　族	建築類型	平面	架構形式	建築年代
C01	890423	雷山県報徳郷郎徳上寨		ミャオ族	高倉	2　間	穿闘式	
C02	890423	雷山県報徳郷郎徳上寨		ミャオ族	高倉	1　間	穿闘式	
C03	890426	従江県増衝寨	石　朝民	トン族	高倉	2　間	穿闘式	
C04	890426	従江県往洞大寨		トン族	高倉	1　間	穿闘式	
C05	890427	従江県下江区巨洞寨	石	トン族	高倉	1　間	真束式	
C06	890427	従江県下江区巨洞寨	石	トン族	高倉	2　間	叉首式	
C07	890427	従江県下江区巨洞寨	石	トン族	高倉	2　間	叉首式	
C08	890427	従江県下江区巨洞寨	石	トン族	高倉	1　間	叉首式	
C09	890427	従江県下江区巨洞寨	石	トン族	その他	1　間	穿闘式	
G01	890425	榕江県忠城区車江郷車寨		トン族	鼓楼	4　間	穿闘式	光緒17年（1891）
G02	890426	従江県往洞大寨		トン族	鼓楼	正方形	穿闘式	
G03	890426	従江県往洞小寨		トン族	鼓楼	正方形	穿闘式	
G04	890426	従江県増衝寨		トン族	鼓楼	八角形	穿闘式	光緒22年（1896）
G05	890428	黎平県茅貢区金洛寨		トン族	鼓楼	正方形	穿闘式	
G06	890428	黎平県茅貢区寨頭郷高進村		トン族	鼓楼	正方形	穿闘式	
G07	890430	錦屏県敦寨鎮亮司一村		ミャオ族	鼓楼	正方形	穿闘式	明代？
G08	890428	黎平県茅貢区寨頭郷高進村		トン族	風雨橋	その他	穿闘式	
G09	890502	錦屏県啓蒙区者蒙郷		トン族	風雨橋	その他	穿闘式	
G10	890428	黎平県茅貢区寨頭郷高進村		トン族	舞台	その他	穿闘式	
G11	890502	錦屏県啓蒙区者蒙村		トン族	涼亭	正方形	穿闘式	
G12	890427	従江県下江区巨洞寨		トン族	祖母堂	1　間	穿闘式	
G13	890428	黎平県茅貢区寨頭郷高進村		トン族	祠廟	その他	？	乾隆30年（1765）
H01	890501	錦屏県城三江鎮	王　名燧	漢　族	複合中庭型住居	3　間	穿闘式	清晩期
H02	890504	鎮遠県仁寿巷37号	傳　舜徳	漢　族	複合中庭型住居	3　間	穿闘式	清晩期
H03	890506	貴定県定東郷半辺街	李　高奎	漢　族	二棟型住居	3　間	穿闘式	
M01	890115	雷山県西江鎮東引村	宋　国栄	ミャオ族	吊脚楼式住居	3　間	穿闘式	1973年
M02	890116	台江県排羊郷排羊村第3組	李　廷勝	ミャオ族	土間式単棟型住居	4　間	穿闘式	1960年
M03	890117	剣河県温泉郷下岩寨村	雷　里正	ミャオ族	吊脚楼式住居	2　間	穿闘式	
M04	890120	青曼郷青曼洞村中寨	龍　栄平	ミャオ族	吊脚楼式住居	5　間	穿闘式	1978年ごろ
M05	890423	雷山県報徳郷郎徳上寨	陳　正清	ミャオ族	吊脚楼式住居	4　間	穿闘式	
M06	890423	雷山県報徳郷郎徳上寨	陳　正平	ミャオ族	吊脚楼式住居	3　間	穿闘式	
M07	890430	錦屏県敦寨鎮亮司一村	龍　世排	ミャオ族	土間式単棟型住居	3　間	穿闘式	1974年
M08	890501	錦屏県城関太平街	傳　栄成	ミャオ族	吊脚楼式住居	2　間	穿闘式	
P01	890121	花渓区碧雲窩吉林村	陳　光志	プイ族	土間式単棟型住居	3　間	穿闘式	1870年ごろ
T01	890118	剣河県凱寨	姜	トン族	干闌式住居	3　間	穿闘式	
T02	890425	榕江県楽里区保里村計悶寨	楊　秀長	トン族	干闌式住居	5　間	穿闘式	
T03	890426	従江県往洞大寨	呉　成栄	トン族	干闌式住居	3　間	穿闘式	
T04	890427	従江県下江区巨洞寨	石　老金	トン族	干闌式住居	2　間	穿闘式	
T05	890427	従江県下江区巨洞寨	石	トン族	干闌式住居	3　間	叉首式	
T06	890427	従江県下江区巨洞寨	石　貴民	トン族	干闌式住居	2　間	穿闘式	
T07	890427	従江県下江区臘俄寨	呉　老田	トン族	干闌式住居	2　間	穿闘式	
T08	890429	黎平県肇興郷義寨村	陸　炳文	トン族	干闌式住居	3　間	穿闘式	
T09	890429	黎平県肇興郷	陸	トン族	干闌式住居	2　間	叉首式	
T10	890429	黎平県肇興郷	陸　運成	トン族	干闌式住居	3　間	穿闘式	
T11	890501	錦屏県三江区大同郷錦所村	楊　林瑞	トン族	干闌式住居	3　間	穿闘式	
T12	890501	錦屏県三江区大同郷錦所村	楊　林梅	トン族	干闌式住居	3　間	穿闘式	
T13	890501	錦屏県三江区大同郷平陽村	楊	トン族	干闌式住居	3　間	穿闘式	
T14	890502	錦屏県啓蒙区啓蒙鎮辺沙村	楊　百順	トン族	干闌式住居	1　間	叉首式	
T15	890502	錦屏県啓蒙区者蒙村八組	胡　千合	トン族	干闌式住居	3　間	穿闘式	
T16	890502	錦屏県啓蒙区者蒙鎮	楊　正有	トン族	干闌式住居	3　間	穿闘式	

C：高倉・乾燥小屋　G：鼓楼・風雨橋などの共有施設　H：漢族住宅　M：ミャオ族住宅　P：プイ族住宅　T：トン族住宅

できうるかぎり多くの家屋を観察・実測することに目標を据えた。また，広域的調査の性格上，集落レベルでの調査よりも，家屋（とくに住居）単体の調査に主眼をおいた。その結果，トン族，ミャオ族，プイ族，漢族の住居・高倉・鼓楼など，合わせて50棟の家屋を実測調査することができた（**表1**）。

調査は，2回に分けておこなわれた(**図1**)。第1次調査は，1989年1月13日～22日に，凱里市・台江県・剣河県などで，おもにミャオ族の吊脚楼（ちょうきゃくろう）を対象として進められた（上野・浅川・羅）。ただし，このときには降雪に悩まされ，当初の調査計画を断念したところもある。続く4月21日～5月8日の第2次調査では，榕江県・従江県・黎平県・鎮遠県などで，おもにトン族の高床住居に関する調査をおこなった（田中・周・宮本・浅川・羅・楊）。このときには天候にも恵まれ，予想以上に大きな収穫を得ることができた。

なお，本年度の調査を進めるにあたっては，貴州省建築設計院・貴州省建築学会・貴州省科学技術協会等の現地諸機関に多大なご支援をいただいた。とりわけ，羅徳啓(建築設計院副院長)，譚鴻賓(貴州省建築専科学校長)，金珏（同副教授），陳肖龍（科学技術協会国際部），潘心雄（黔東南苗族侗族自治州外事弁公室主任）の5氏には，ひとかたならぬお世話になった。この場をかりて，感謝の気持ちを記しておきたい。

2．トン族の高床住居と集落

2－1．高床住居の類型と構造

(1) 床上平面の類型と空間利用

トン族の高床住居（yang，ngang，lang）については，全部で16棟（T_{01}～T_{16}）を実測調査した（**表1**）。まずは，床上平面の類型と空間利用について検討してみたい。

①1間タイプ：　従江県往洞大寨のT_{03}（**図2**）は，妻庇の部分を除いた身舎が，間口1間しかない。ただし，半開放的な最前室は，身舎と両妻庇領域が一体となっている。第2列は，中央の身舎1間をイロリ部屋とし，西妻庇が階段室，東妻庇は寝室になっている。第3列（最後列）は，身舎と西妻庇が粮倉，東妻庇が寝室に分かれる。柱間寸法は，間口が身舎で10尺（1丈），両妻庇で5尺。奥行は第1列と第3列が8尺，中央第2列が6尺×2柱間である。分家した小規模家族向けの，比較的新しい住居と思われる。

②2間タイプ：　間口2間のタイプは，4棟調査できた（T_{04}・T_{06}・T_{07}・T_{09}）。もっとも典型的な平面を示すのは，従江県巨洞寨のT_{04}である。西妻庇に階段（guei）室を設け，2間の身舎は最前列の走廊（wupa）で一体とする。しかし，第2・3列では中央柱列の板壁間仕切り

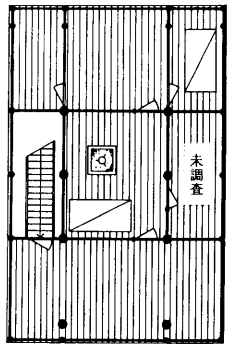

図2　T_{03}の床上平面

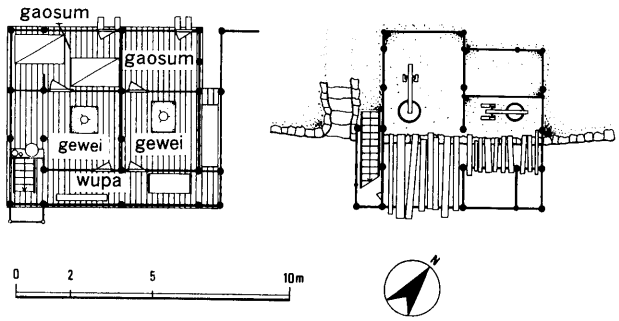

図3　T_{04}の床上平面（左）と床下平面（右）

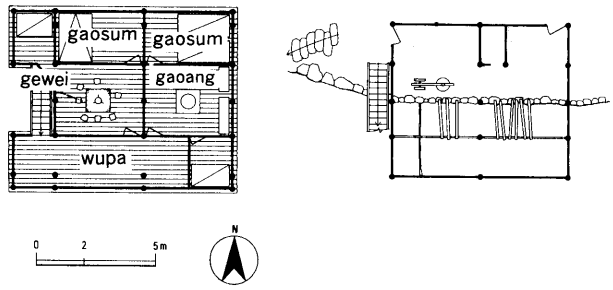

図4　T_{06}の床上平面（左）と床下平面（右）

によって，2つの領域に区分され，分家した2世帯によって分割利用されている。第1列のwupaは，通路であると同時に，2世帯に共有される憩いと作業の空間でもある。腰掛けや籠のほかに織機が置かれ，女たちが盛んに機を織っていた。第2列の部屋は，gaoangまたはgeweiという。gaoangというのは，炊事（ang）の部屋（gao）という意味で，一方のgeweiはイロリそのものを指す言葉でもある。イロリは4辺を石板で枠どり，灰の上には3脚の五徳（tia）を置いて火をたく。第3列の部屋（gaosum）は，寝る（sum）部屋（gao），すなわち寝室である。

T_{06}も，同じ巨洞寨の2間タイプ。平面もT_{04}とよく似ている。やはり，分家による住居の分割利用がおこなわれており，身舎第2・3列は2分割され，2列めの両室にはともにイロリがある。T_{04}と異なるのは，wupaの片

隅に子供部屋が設けられていることぐらいである。巨洞寨に近い臘俄寨の T_{07} も，T_{06} とほぼ同じ平面を示している。

黎平県肇興郷の T_{09} は，以上の3棟とはやや異質な2間タイプである。wupa の領域がなく，全体が「田の字」形の平面をしており，西側の2室は寝室，東側は前がヒロマ，後がイロリ部屋になっている。この平面は，柱の痕跡によって，3間分の1間が撤去され，2間になったことがわかる。

③3間タイプ：　実測したなかでは，3間タイプが10棟ともっとも多い。いくつかの平面バリエーションがみられるが，2間タイプに近いのは，T_{04}・T_{06} と同じ巨洞寨の T_{05} である。身舎が2間から3間に増えた以外に，ほとんど変わるところがないからだ。しかも，面白いことに，T_{05} は分家した2世帯に分割されているので，第2・3列が柱筋で3分割されるのではなく，中央間の真ん中で2等分されている。つまり，空間利用という点では，T_{05} と T_{04} にまったく差がないわけだ。

T_{05} 以外の3間タイプで，前廊(wupa)をもつのは T_{10} だけだ。以上の T_{04}・T_{05}・T_{06}・T_{07}・T_{10} は，間口2間か3間かを問わず，wupa（作業場）→ gaoang（イロリ間）→ gaosum（寝室）という機能の序列が，〈前→中→後〉という空間の序列に対応している。ところが，その他の3間タイプでは，むしろ〈左←中→右〉という序列性によって，空間が統制されているようだ。

1例として，剣河県凱寨の T_{01} をみてみよう。T_{01} には，前列の中央間に，olling というヒロマがある。このヒロマは，明らかに漢式の「堂屋」を模した部屋で，八仙卓が置かれ，祖先を祀る赤い紙が正面壁に貼りつけてある。入口は東側の階段（enrang）を上がったところにあり，そこから走廊(zourang)を通って olling にいたる。olling の奥，すなわち中央間の後列には，shouwei というイロリ部屋がある。凱寨では，高床の面からさらに1段高く張った床に，イロリを切っている。西側の1間は，走廊を除いた部分を奥行方向に2等分して，duai という寝室を2室置く。また，この住居は兄弟家族の分家によって2分割されており，東側の1間には，別の一家の duai と shouwei が前後に1室ずつ設けてある。olling は，両世帯の全構成員に共有される空間でもあり，明らかに住居のなかの中心領域として位置づけられるだろう。

T_{01} にみられるような，中央の前列に「堂屋」を据え，その後列にイロリ部屋，左右を寝室に振り分ける平面構成は，T_{08}・T_{11}・T_{12}・T_{14}・T_{15}・T_{16} にも共通しており，すでに指摘したように，2間タイプの T_{09} も，この平面の変形と考えられる。また、ミャオ族・プイ族・漢族の3間タイプも，これに類する平面からなっており，相互の系譜関係に留意する必要があるだろう。

やや特異な平面といえるのは，錦屏県平陽村の T_{13} である。全体がコ字形からなる，開放三合院風の高床住居で，中庭には方池を設けている。正房部分から飛び出した脇棟には，子供部屋と倉が設けてある。9人構成の比較的大規模な家族に適応した住居といえるだろう。

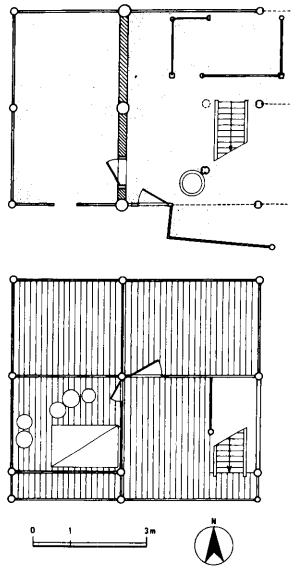

図5　T_{09} の床上平面（下）と床下平面（上）

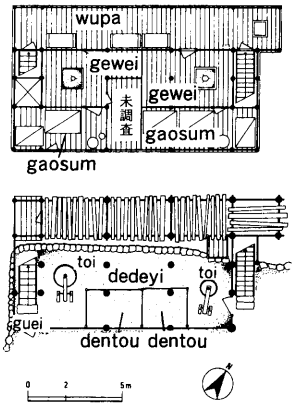

図6　T_{05} の床上平面（上）と床下平面（下）

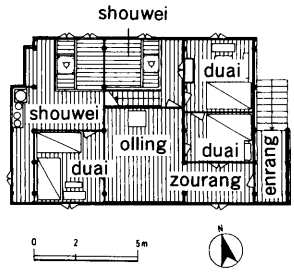

図7　T_{01} の床上平面

④5間以上のタイプ：　榕江県の保里村では，間口の長い高床住居をいくつかみることができた。T_{02} は，その1例である。身舎5間に両妻庇の取り付いた平面で，第1列には前廊（donglang）が東西に通る。身舎第2列は，両端が寝室，西から2室めには「堂屋」風のヒロマを設け，東側の3室はイロリ部屋とする。保里のイロリも，凱寨と同じく，1段高い床に切られる。第3列は，すべて寝室である。以上からみると，T_{02} の平面構成は，上述の〈前→中→後〉と〈左←中→右〉という2つの空間分節の原理がミックスしたものといえそうだ。居住世帯は，交差イトコの関係にある2組の夫婦とその子供たちによって構成され，一方の子供のなかにはすでに結婚して，同居しているものもいる。イロリが3室に分散しているのは，この3つの世帯に対応しているのである。

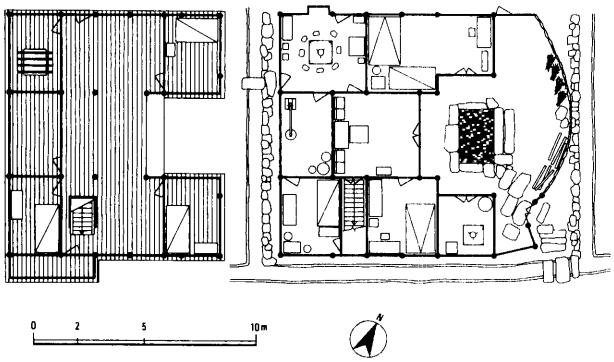

図8　T_{13}の床上平面（左）と床下平面（右）

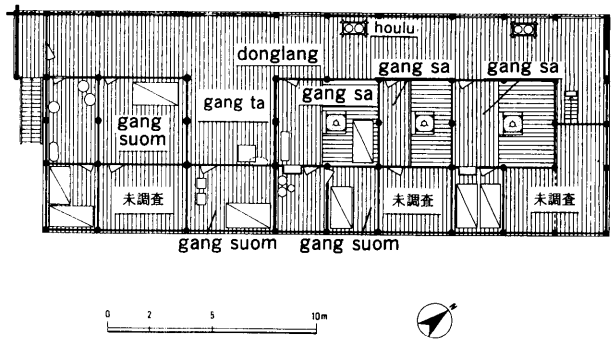

図9　T_{02}の床上平面

(2) 床下の空間利用

床下が，人の居住空間になることはない。また，籾の貯蔵庫として使われることもない。そこは，家畜と農作業のための空間である。この原則は，どの村にもあてはまるが，巨洞や臘俄のような僻地集落では，床下利用のより原初的な形態がみられる。巨洞では床上をwumeng，床下をdedeyiといい，dedeyiには必ず豚や鶏を養う柵囲い（dentou）が設けられ，踏臼（toi）が地面に固定されている。一般的に，踏臼の数は階段(guei)とイロリ(gewei)の数に対応している。すなわち，それらはすべて，その家屋に居住する世帯の数を反映するものであるからだ。

漢族の居住区に近い地域では，踏臼がみられなくなるが，その反面，床下にカマドを持ち込む例が少なくない。この場合，錦屏県の者蒙（T_{15}・T_{16}）では，草や水苔を大カマドで煮込み，豚の飼料にする。ところが，肇興郷のT_{08}では，間仕切りをしつらえて，カマドを備えた厨房をつくっている。

というように，床下の利用形態もいささか多様になってきているが，明代の『赤雅』などに記された「人は其の上に棲み，牛羊犬豕は其の下」という居住様式に，大きな変化はみられないようである。

(3) 木造構法と細部

高床住居の架構形式は，穿闘（せんとう）式（立帖式）と叉首（さす）式に大別できる。量的には，穿闘式が13棟と圧倒的多数を占める。しかし，後述するように，高倉には叉首を用いるものが多く，また雲南タイ族の高床住居も叉首を多用することなどから，叉首式をより古式の構法とみなすことも不可能ではないだろう。

まずは，巨洞寨のT_{04}を例にとり，穿闘式の構法について説明してみよう。**図10**にみえるように，棟筋と入側柱筋では通し柱が用いられ，直接棟木もしくは母屋桁を支える。これに対して，側柱筋では，礎石上の柱が床板の下面までしか到達していない。桁をうける床上の側柱は，床下の側柱よりも外側に位置する「垂花柱」（吊束）で，

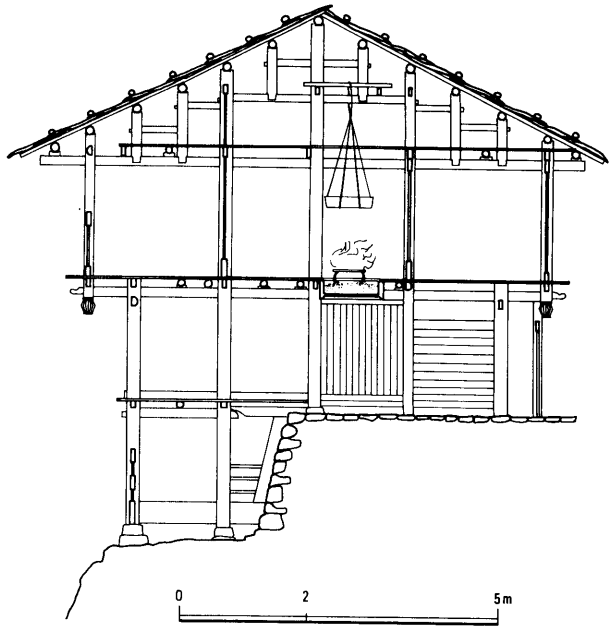

図10　T_{04}の断面

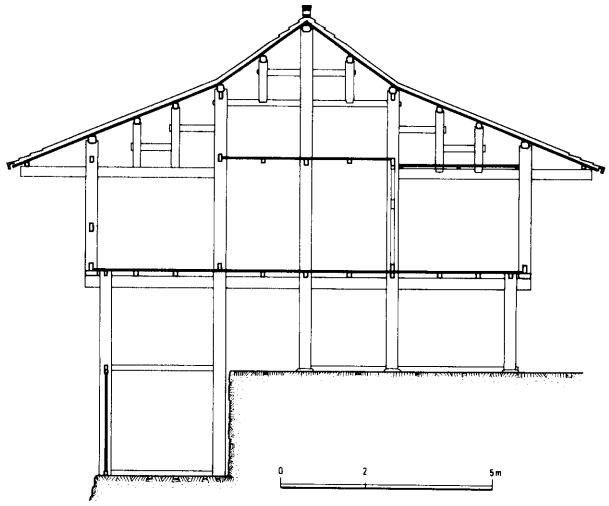

図11　T_{02}の断面

下端部が床下側柱の上端部と貫で連結されている。貫が垂花柱を貫通するのではなく，たんに垂花柱が貫の上にのる場合もある（保里のT_{02}）。

桁は柱の上だけではなく，側柱と入側柱の間に2カ所，入側柱と棟持ち柱の中間に1カ所あり，いずれも束によって支えられる。束は，通し柱と垂花柱をつなぐ貫の上に大瓶束風にのり，ひとつ棟筋寄りの束か柱と貫で繋結される。以上のように，トン族住居の架構は，梁をまったく使用せず，貫・桁・束・柱だけで構成されるものである。なお，貫と柱・束とのジョイントには，柱・束の仕口に貫の先端枘を貫通させ，枘の端部を栓でとめる鼻栓の手法を採用している。

一方，叉首式構法の代表は，肇興のT_{09}である。T_{09}は小屋組に貫を用いていない。束も，補強用の後補材を除いては使用されていない。母屋桁をうけるのは，棟持ち柱と側柱の上端を斜めにつないだ叉首風の部材である。この「叉首」が母屋桁をうける部分には，やや大きめの切欠きをつくっている。

穿闘式と叉首式の複合という点では，巨洞のT_{05}が示唆的だ。T_{05}の小屋組は，wupaでは穿闘式構法を用いているが，イロリ部屋（gaoang）から裏側では叉首組としている。このように，来客の眼に触れやすい領域では穿闘式構法を採用し，閉鎖的な領域で叉首式構法を採用していることからも，叉首式がより伝統的な手法で，穿闘式はいくぶん新しく導入された，格式の高い構法であることが推定できるだろう。

細部についても若干触れておこう。まず屋根だが，瓦葺きと杉木（コウヨウザン）樹皮葺きの両方がある。いずれの場合にも，野地板や木舞に相当するような材は用いず，垂木上に直接葺き材を葺く。ただし，垂木は角材ではなく，板状の材を密に敷いており，野地板の役割もある程度は果たしている。また，棟の処理は，杉皮葺きの場合はいたって簡単で，一方の杉皮を棟から1尺ほどせりださせるに過ぎない。瓦葺きの場合は，瓦を縦にならべて敷き詰めた立派な棟飾りがつくられる。

次に装飾だが，垂花柱の下端に簡単な幾何学的図形が彫刻され，また垂花柱の下端を突き抜ける貫の木鼻に豚や鳥が象られる。これらの装飾が，純粋な装飾に過ぎないのか，あるいは，なにか特別の意味を担うものなのかは，いまのところわからない。今後の調査に残された課題であろう。

2－2．高倉と群倉

倉のことを，トン語で，ソー（so）という。住居とは別棟のsoをもつ集落と，もたない集落がある。別棟のsoがない集落では，住居のなかに籾を貯蔵する部屋を設ける。この貯蔵部屋も，またsoという。たいてい，床上の第2・3列に配置されるが，屋根裏の1室をsoとするところもある。別棟のsoをもつ場合でも，集落の内部にそれが点々と分散するところと，巨洞に代表されるように，集落の外側に群倉の形成されるところがある。

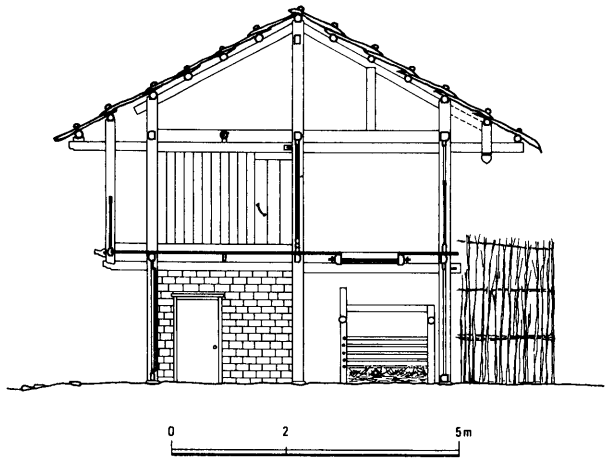

図12　T_{09}の断面

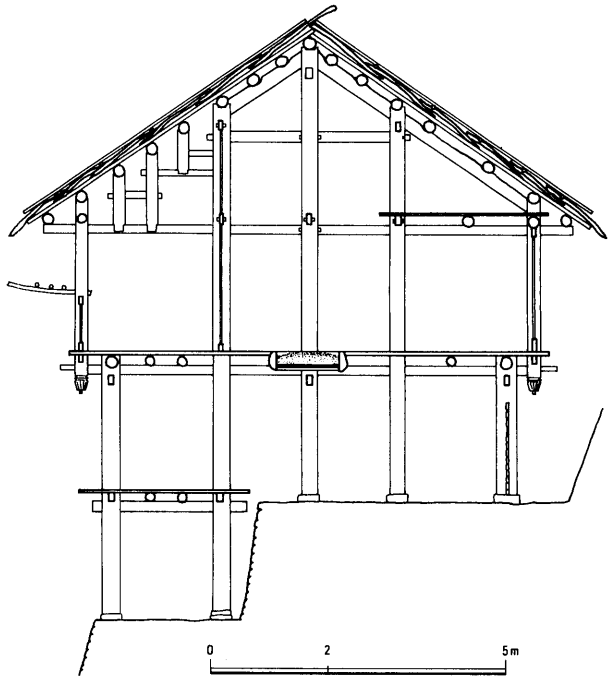

図13　T_{05}の断面

(1)　機能と平面

調査では，トン族とミャオ族の高倉を8棟(C_{01}～C_{08})，高倉の構造に類似する食物乾燥小屋を1棟（C_{09}）実測できた。以上の9棟を機能的にみると，次の3つのタイプに分けることができる。

①純粋な穀倉：　穀倉以外としては機能しない高倉で，実測例の大半はこのタイプに属する（C_{01}・C_{02}・C_{05}・C_{06}・C_{07}・C_{08}）。このうち，C_{01}とC_{02}がミャオ族，C_{05}～C_{08}が巨洞寨のトン族のものである。前者には家屋の平側両面に縁が取り付くが，後者では前側1面にしか縁がない。民族別にみた差異といえば，この点ぐらいであろう。身舎の平面には，柱間1間のものと2間のものがある。ただし，柱間が1間でも中央に間仕切りを設けて，貯蔵室を2間とする例もみられた。

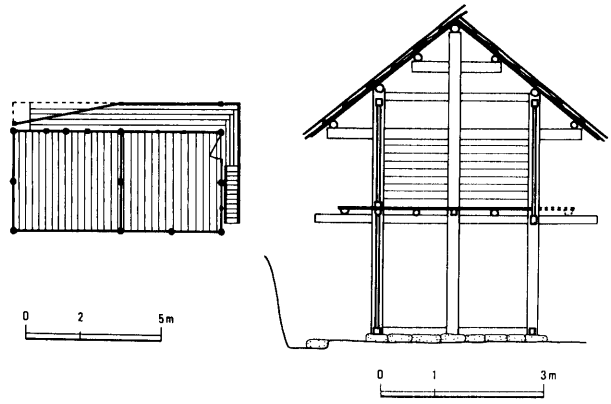

図14　C_{01}の平面（左）と断面（右）

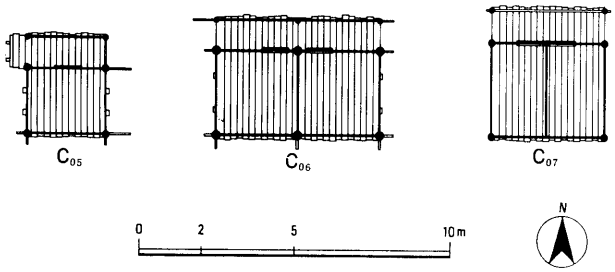

図15　C_{05}・C_{06}・C_{07}の平面

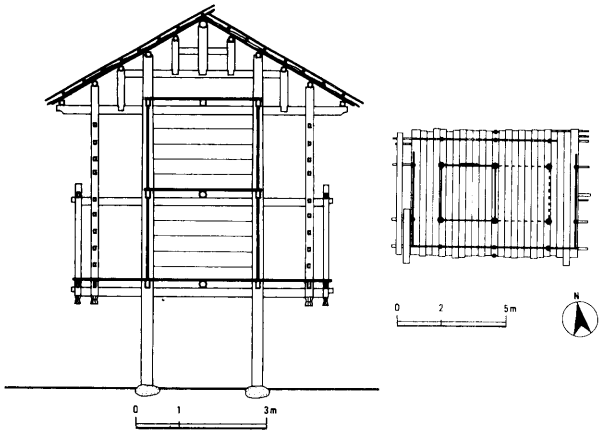

図16　C_{03}の平面（右）と断面（左）

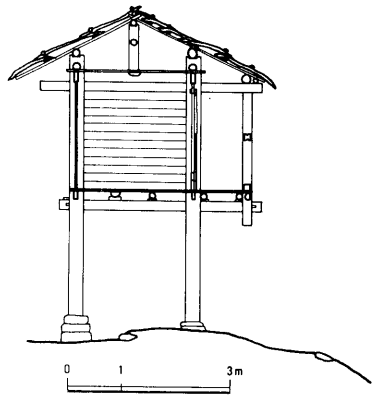

図17　C_{05}の断面

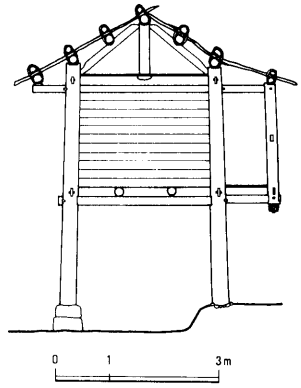

図18　C_{06}の側面

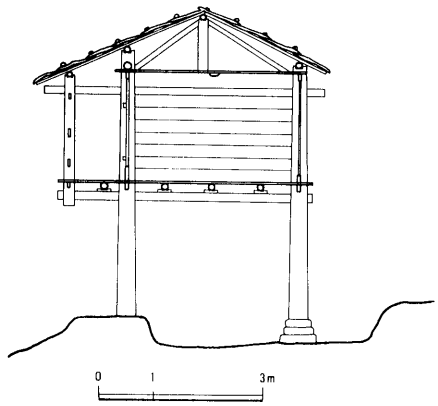

図19　C_{07}の断面

②穀倉兼乾燥小屋：　外観が柵囲いのような高倉もある（C_{03}・C_{04}）。従江県の増衝寨や往洞寨でみたトン族の高倉は，すべてこの形式だった。高床の柵囲いのようにみえるのは，身舎4周の縁の端に立てた垂花柱を，数本の貫がつらぬいているからだ。じつをいうと，この貫は物干し竿で，自由に取り外しがきく。4月末の調査時には，たくさんの青菜がこの竿にかけられて，日干しにされていた。つまり，このタイプは，③の乾燥小屋としての機能も兼ね備えた高倉なのである。面白いことに，垂花柱をつらぬく貫（竿）は，梯子の役割も果たしている。一般に柱間2間の貯蔵室は上下2層からなっており，2階の貯蔵室に上がるために，この貫を梯子代わりに使うのである。

③純粋な乾燥小屋：　C_{05}～C_{08}が集中して所在する巨洞の群倉地区には，ごく少数だが，倉とは別の乾燥小屋もみられた（C_{09}）。②タイプの身舎の壁が抜けてしまったような建物と思っていただければいい。

(2)　架構の類型

穀倉の架構にも，いくつかのバリエーションがある。驚いたことに，巨洞の群倉地区で実測した近接する3棟の倉（C_{05}・C_{06}・C_{07}）は，いずれも架構を異にしていた。C_{05}は，真束を用いて棟木を支え，垂木をわたして杉皮を葺く。ところが，C_{06}は，真束と叉首で棟木・桁をうける

が垂木はわたさず，杉皮を直接桁と棟木にのせている。また，C_{07}は真束・叉首・垂木すべてを使った小屋組に杉皮を葺く。やや離れた位置にあるC_{08}は，C_{06}と同じ小屋組で建てられていた。巨洞では，以上のような豕叉首式もしくは真束式の構法による高倉が大多数を占めている。しかし，C_{09}のように，穿闘式の架構を採用する例がないわけでもない。同じ従江県のトン族でも，往洞や増衝の例では，むしろ穿闘式のほうが一般的である（C_{03}・C_{04}）。また，トン族およびミャオ族の高倉全般を見わたしても，穿闘式のほうがより普遍的な構法といえるだろう。

(3) 巨洞の群倉

従江県の下江から船に乗り，都柳江を1時間ばかり下ったところに，巨洞という集落がある。戸数153戸，人口775人で，村人すべてが石姓を名のる。集落は，都柳江南岸側の山の傾斜面に立地する。船以外に交通の手段がなく，周辺地域と隔絶した状況にあるためか，調査したなかでは，伝統的な文化形態をもっともよくとどめる集落であった。

なかでも，われわれを驚かせたのは，住居集合地区の外側に形成された群倉である。巨洞では，各世帯がかならず住居とは別棟のsoをもち，それらを一定の地区に集中して建立する。少ないところでは数棟，多いところでは数十棟からなる群倉が，緩衝帯を隔てた住居集合地区の外側に形成されているのだ。

図20は集落の東端に形成された群倉で，全部で52棟の高倉が集中する。52棟のうち，41棟は1間タイプ，残りの11棟は2間タイプである。したがって，全部で63間の穀物貯蔵室がある。2間タイプの高倉は，2世帯によって共有されるので，この52棟は63世帯に対応している。

倉のなかには，もち米を穂刈の状態で貯蔵している。ふだんは，どの倉にも梯子がついていない。米を取り出したいときには，きざみ梯子(guei)を家からかついできて，床上に上る。そして，鍵をあけて必要なだけ穂を取り出し，やはり梯子をかついで家にもって帰る。住居のなかでは，イロリの上に吊るされた平底のカゴ(gang)に稲穂をのせて，煙で燻(いぶ)していた。

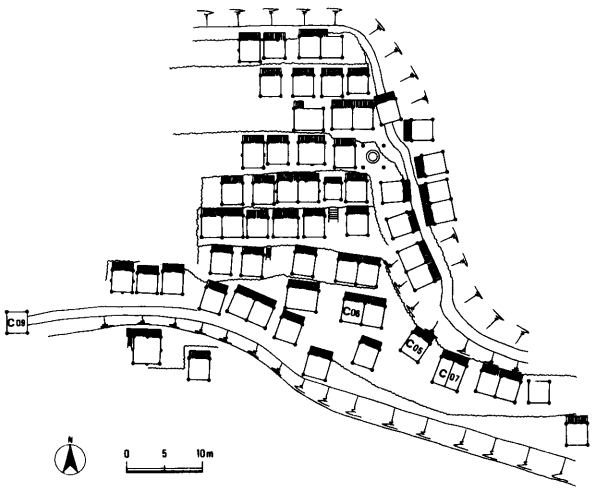

図20　巨洞の群倉配置

他の地域では，モチ米ではなくウルチ米を籾の状態でsoに貯蔵するところが多い。これに対して，巨洞ではsoの建築構造だけでなく，その貯蔵方式にも，より古風な形態がとどめられている。

2－3．集落の共有施設

(1) 鼓楼の機能と構造

トン族集落の中心にそびえたつ鼓楼（beng）は，集落景観に強烈なアクセントを加えるとともに，村の社会的中核として，きわめて重要な役割を担っている。呉正光［1985］によれば，多様な鼓楼の用途のなかでもっとも重要なのは，群衆を集めての議事と紛糾の解決にあるという。すなわち鼓楼は，「議会」および「法廷」の役割を兼ね備えたトン族社会の中枢であり，たんに太鼓を打ち鳴らして時を知らせたり，人びとを召集したりするだけの単純な建物ではない。

また，集落内に建てられた鼓楼の数は，村を構成する下位集団の数に対応している。たとえば，黎平県の肇興では，村が仁・義・礼・智・信の5つの族姓に分かれ，各同姓集団は仁寨鼓楼・義寨鼓楼・礼寨鼓楼・智寨鼓楼・信寨鼓楼という各自の鼓楼を所有する。ここにいう「寨」とは，同じ族姓の集団によって形成されたより小規模な「村」のことであり，鼓楼と「寨」は完全な数的対応を示している［胡 1986］。

調査では，7棟の鼓楼を実測することができた（G_{01}～G_{07}）。このうち，G_{01}（車寨鼓楼）とG_{04}（増衝鼓楼）については，すでに『黔東南文物誌（第一集）』に簡単な紹介がある［劉 1985；陳 1985］が，実測図はまったく示されていない。

鼓楼をもっとも頻繁にみることができたのは，榕江から黎平にかけての一帯である。車で通り過ぎるトン族の集落には，かならず1棟以上の鼓楼があり，しかも形態を同じくするものはひとつとしてない。それぞれの「寨」は，独自の形態をもつ鼓楼を築いている。

とはいうものの，平面や架構がかなり普遍的な原理に支配されているのも，またたしかだ。まずは，G_{01}をみてみよう。榕江県車寨のG_{01}は方形平面，3階建ての鼓楼である（**図21，22**）。清の道光年間（1823～1850）に建立されたが，母屋桁の銘により光緒17年（1891）の重建と知られる。1階は前面開放，板張りの床は前方にややせり出して湾曲する。これは，この鼓楼がトン劇の舞台を兼ねているからだ。構法は，住宅における穿闘式構法を応用したものとみて誤りはない。4本柱を通し柱として母屋桁を支え，庇柱は軒桁をうける貫で通し柱につないで

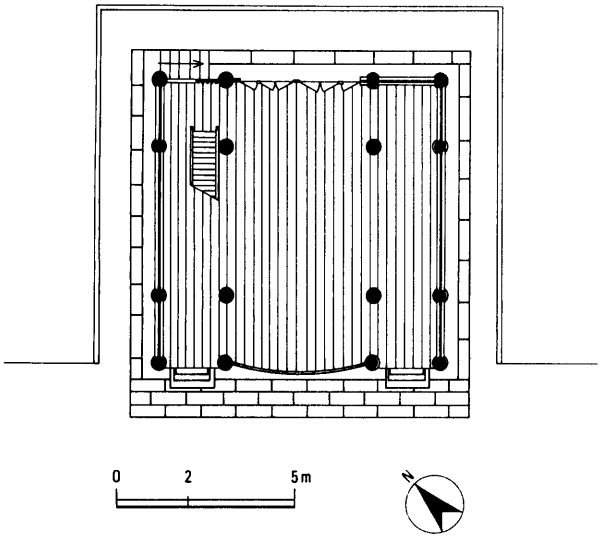

図21　G_{01}の１Ｆ平面

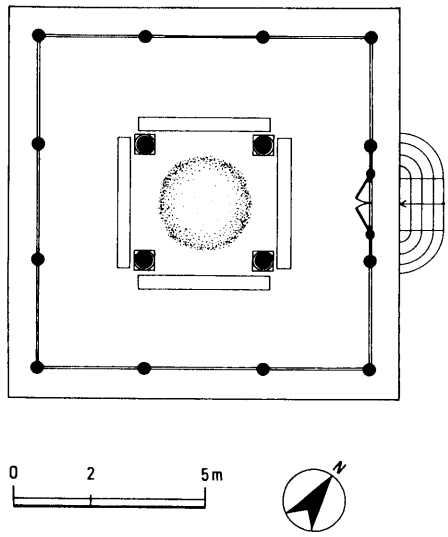

図23　G_{02}の平面

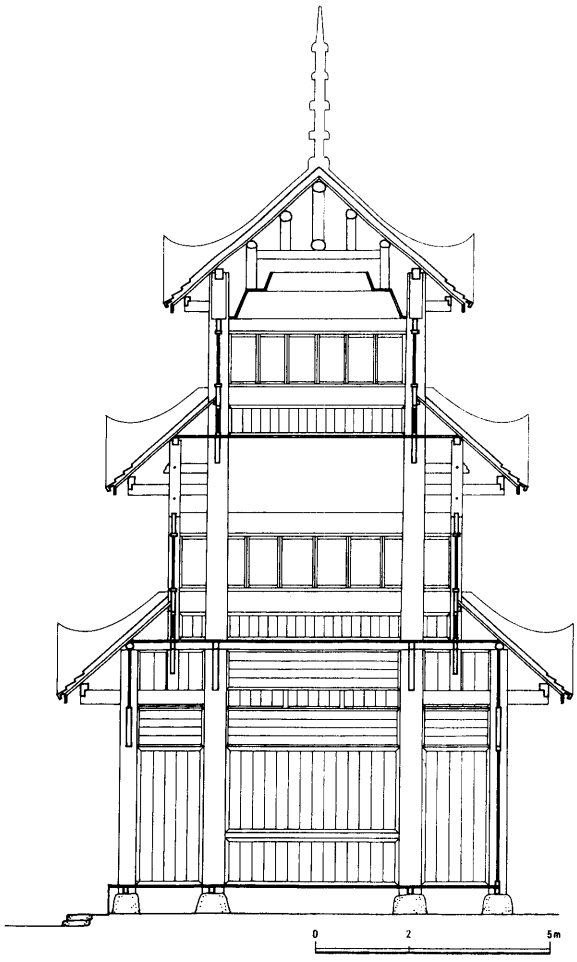

図22　G_{01}の断面

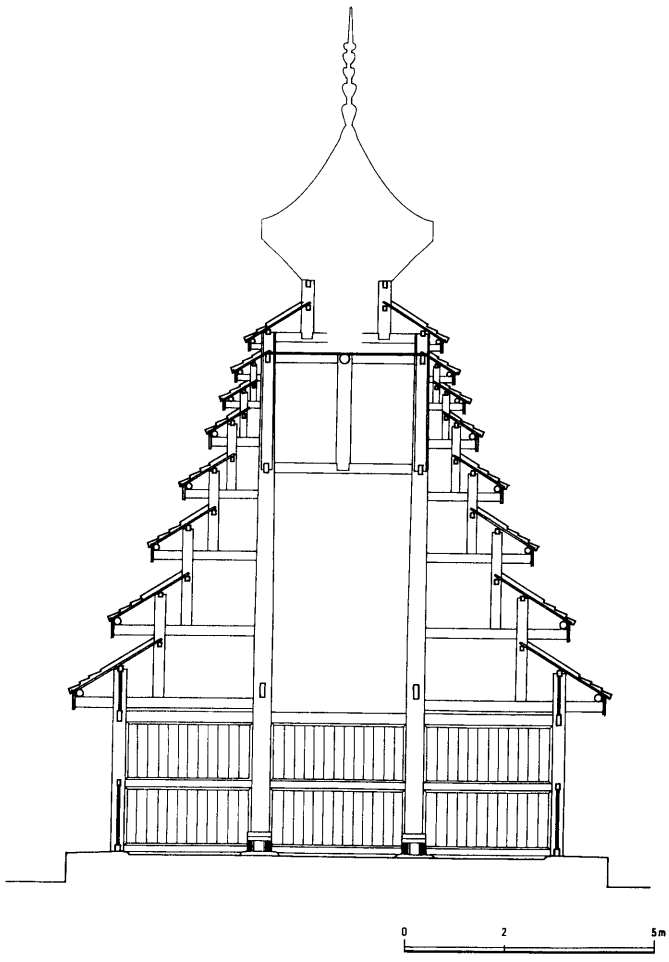

図24　G_{02}の断面

おり，２階の庇柱は１階の貫上にのるので垂花柱の感じに近い。

従江県往洞大寨のG_{02}も，同じ方形平面の鼓楼である（**図23，24**）。ただ，１階は土間で，４本柱を囲むように長椅子が置かれ，その内側は土間を緩やかに掘り込んで，大きな炉としている。庇は８重もあるが，内部は，土間から約７ｍの高さに床を張るだけの２階建てである。この２階で，太鼓をたたく。庇はG_{01}よりもはるかに多いが，構法の原理はまったく変わらない。ただし，２階の床下には４本柱に貫を通し，その交点に真束をたてている。身舎の屋根の上には，さらに持送りを連ねてせりだした最上層（頂部）の屋根をのせるが，この部分の構造

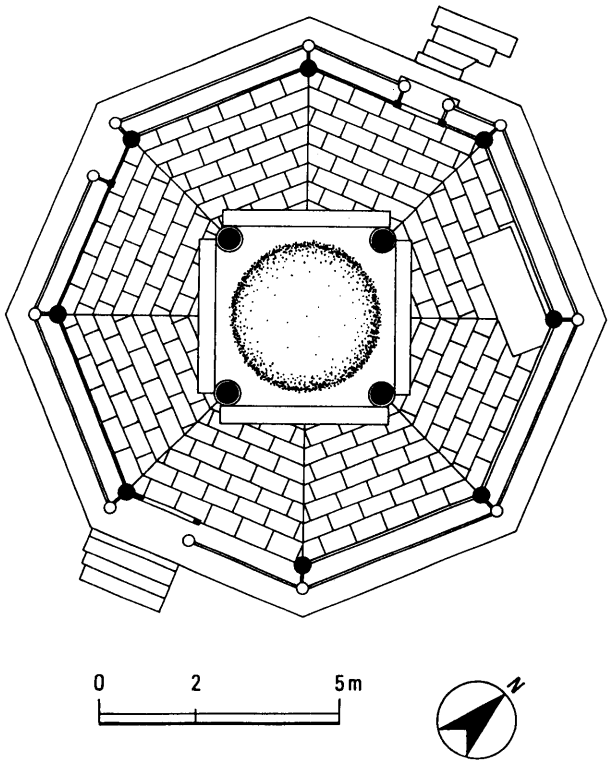

図25　G_{04}の平面

については調べきれなかった。村人によれば，建立は50年ぐらい前のことという。

このほかG_{03}・G_{05}・G_{06}も，ほぼ同じ方形平面のものだが，従江県増衝のG_{04}は八角形平面の代表的な鼓楼である（図25）。建立は清の康熙11年（1672）と伝えるが，光緒22年（1896）の石碑があり，このときに重建されたものらしい。1981年に，省の重点文物保護単位に指定されている。外観は11層の庇と重層の頂部からなり，全高で20mをこえる。平面は八角形だが，中央4本の通し柱はここでも使われている。ただ，庇柱は，4本柱の対角線の延長上に4本と，4本柱の中点交線の延長線上に4本，合わせて8本立てられて，全体が正8角形平面となる。

いささか注目したいのは，方形平面のものでも，下層の庇2層だけを方形とし，3層以上を八角形にする例がみられたことだ。このような例を実測する機会には恵まれなかったが，何棟かの撮影には成功した。こうして屋根に変化を与えたり，庇屋根の軒先にトン劇の物語を表現する人物像や動物像を飾りつけたりすることによって，外観上さまざまな鼓楼が生み出されるわけだ。なお，錦屏県亮司一村のG_{07}は，ミャオ族の鼓楼である。一般にミャオ族は鼓楼をもたないので，希少な例といえるだろう。一方，トン族の場合でも，すべての集落に鼓楼があるわけではない。とくに注意したいのは，巨洞のような僻地集落に鼓楼がみられないことである。とすれば，高度な建築技術を背景とする鼓楼は，漢族の先進技術を受け入れやすい地域で導入され，発展を遂げたものなのかもしれない。

(2)　風雨橋・舞台・涼亭

鼓楼とともに注目をあつめているのは，屋根のかかった橋，すなわち風雨橋である。風雨橋は花橋ともいい，トン語ではdyuyangという。この橋の両側面には，腰掛けも作り付けになっている。つまり，風雨橋は，たんに川を横切るための構築物ではなく，次に述べる「涼亭」の機能も充足した，くつろぎの施設ということができるだろう。また，集落の境界に設けられた風雨橋の上で，来客を接待して宴会を催す場合もあるようだ。

調査では，黎平県の高進村（G_{08}）と錦屏県の者蒙村（G_{09}）で，風雨橋を実測できた。図26・27は者蒙の風雨橋である。范述波［1986］によれば，この橋は民国23年（1934）に建立されたのち，1948年に火災によって⅓が焼失したが，53年に地方政府によって修理・復原されたという。全長48m，幅4mの細長い橋で，全体を切妻屋根が覆うほか，鼓楼に似た3層の楼閣が中央に飛び出し，外観上のアクセントになっている。架構は，穿闘式である。

このほか，トン劇を演じる舞台や涼亭も，村人に共有される娯楽と憩いの施設である。G_{10}は黎平県高進村の舞台（taishi）で，鼓楼（G_{08}）の隣に配置されていた。中央の舞台を軸にして，対称コ字形に回廊をめぐらした三合院平面からなる。この三合院全体が高床になっており，観衆は1層低い石敷きの中庭から劇をみる。一方G_{11}は，

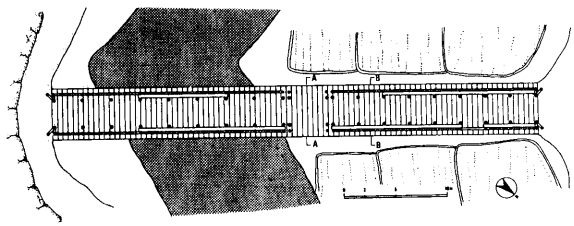

図26　G_{09}の平面

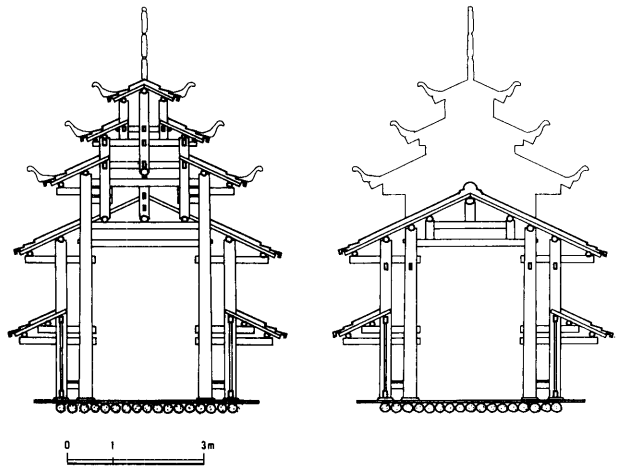

図27　G_{09}の断面（橋桁から上）

錦屏県者蒙村の涼亭である。涼亭は，文字どおり，涼をとるための「亭」（あずまや）で，江南漢族の農村などでもよくみかける。ただ，漢族の涼亭が基壇立ちであるのに対して，トン族のそれはあくまで高床式だ。しかも，床の中央にはイロリが切ってある。架構は，G_{08}・G_{11}ともに穿闘式を採用している。

(3) 祖母堂と娘宿　～女をめぐる習俗と建築

トン族の社会は，父系原理の核家族を基本単位としている。すなわち，同一の住居に居住する「家族」は，父系出自の夫とその妻，およびかれらの子供たちからなる。男の子供が妻をめとって孫をもうけると，分家して親兄弟から経済的に独立する。分家にあたっては，若夫婦一家のために住居が新築される場合と，もとの住居の一部を分与する場合の両方がある。また，財産は，原則的に父系のラインによって継承される。

以上のように，トン族の社会は，父系出自・父系相続・父（夫）方居住を基盤にした男性主軸の社会だが，興味深いことに，超自然の世界においては，女性のほうに優越性がある。『侗族簡史』によれば［《侗族簡史》編写組 1985］，トン族の民族宗教には多数の女神がいる。たとえば，山池をまもる sax tiuk，橋や床をまもる sax jiuc，霊魂を奪う sax liagx，至高無上の尊神 sax sis などはすべて女神である。sax sis は神威最大にして，いっさいの事象を司る神であり，民と村に平安をもたらすという。この sax sis を祀る儀礼建築が，dang sax または dang xenhsax と称される「祖母堂」である。巨洞の G_{12} はその１例だが，利用形態その他の詳細については調査できていない。鼓楼が集団の政治的中枢であるとするならば，祖母堂は宗教的な中枢とみなせる施設であり，今後，多方面からの分析が試みられるべきであろう。

一方，「女の建築」としては，青年男女の恋愛の場となる「娘宿」にも注目しなければならない。貴州のトン族・ミャオ族が，接客や宴会に「歌垣」を用いることはよく知られているが，男女の恋愛でも，それは必要不可欠な手段である。やはり『侗族簡史』によると，榕江県の楽里一帯では，未婚の女性は親もとから離れて高楼に１人もしくは数人で寝泊まりする。この高楼の門や窓は，いつでも開いている。未婚の男たちは，窓の前に梯子をかけて駆け上がり，そこで歌をうたって女性に愛を語りかけるのだ。これに対して，女性も歌で受け答える。このような歌垣による恋愛の習俗や，その舞台となる娘宿（高楼）については，残念ながら，観察できる機会に恵まれなかった。今後の調査に期待したい。

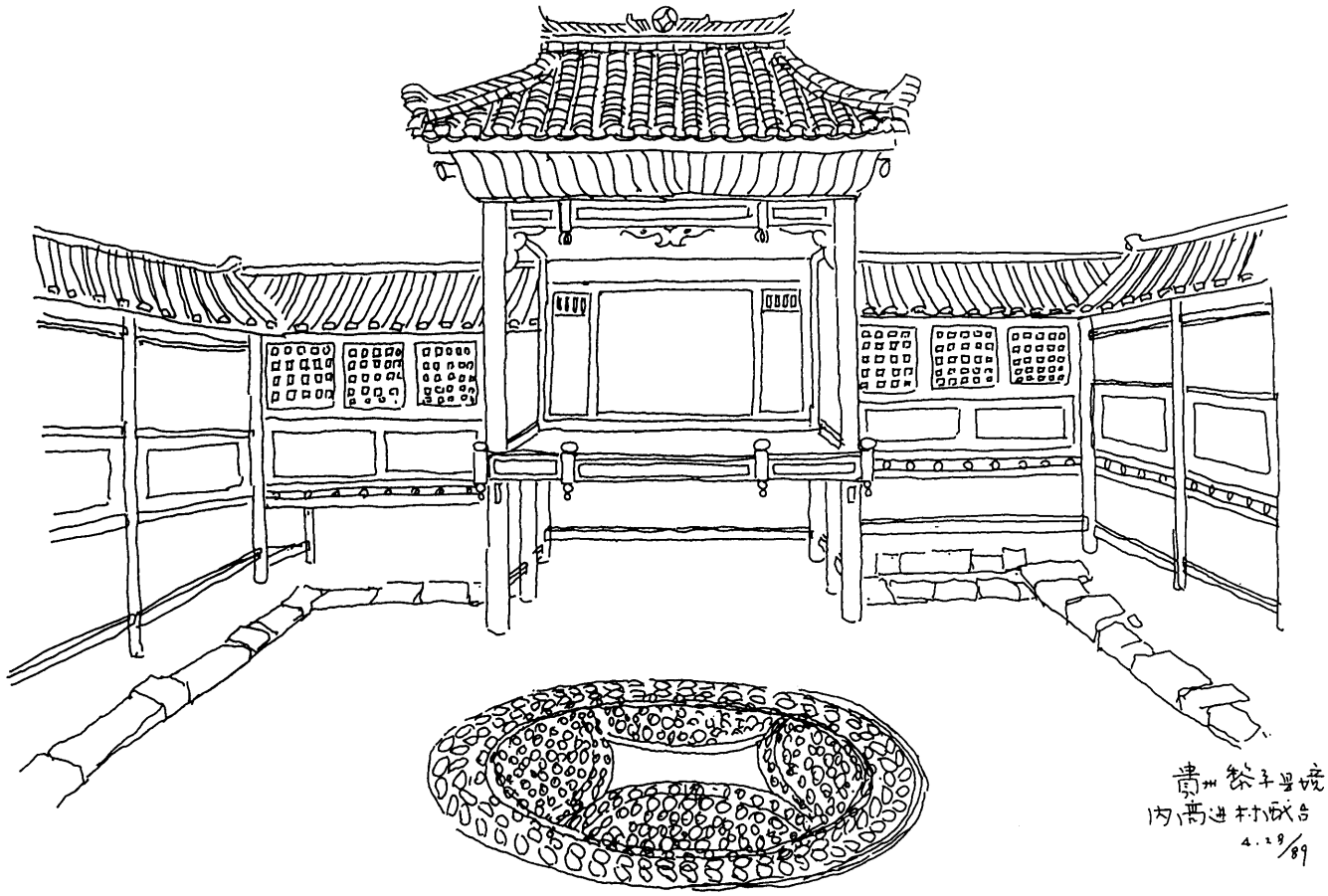

図28　G_{10}のスケッチ（金珏画）

3．周辺諸民族の住居

3－1．ミャオ族の吊脚楼と土間式住居

ミャオ族は，ヤオ族とともに苗瑤語族を構成する民族である。がんらい焼畑を生業とする移動民族であり，言語・文化的に，トン族とは異質な側面が多い。

ミャオ族の住居（tse）については，8棟を実測することができた（M_{01}～M_{08}）。このうち，6棟は吊脚楼と呼ばれる懸造（かけづく）り式の住居（M_{01}・M_{03}・M_{04}・M_{05}・M_{06}・M_{08}），残りの2棟が土間式住居（M_{02}・M_{07}）である。ここではまず，土間領域から板敷きの床がせりだした吊脚楼の位置づけを検討しておこう。というのは，一般に（そして安易にも）吊脚楼が，高床住居の一変型とみなされがちだからである。たしかに，トン族の高床住居とミャオ族の吊脚楼の断面を比較すると，まるで瓜ふたつのような構法であることがわかる。ところが，その居住生活面に着目すると，両者の差異は決定的だ。すなわち，トン族は「床上（2階）」をその生活面とするが，ミャオ族は土間領域を含む「床下（1階）」を主要な生活面とし，2階は収納・貯蔵室・子供部屋に充てている。つまり，吊脚楼は，土間式住居が山の傾斜地形に適応して生成された住居形式と考えられ，高床住居の範疇に属するものではなく，むしろ土間式住居の変種とみなすべきものなのである。

以上のような吊脚楼と高床住居の本質的な差異は，稲作を背景とする高床居住民・トン族と，焼畑を背景とする土間居住民・ミャオ族との，かなり祖原的なエスニシティの差異を反映するものといえるだろう。ミャオ族本来の住居は，海南島ミャオ族の住居がそうであるように，素朴な土間式の家屋であり，実際に貴州でも平地に建つM_{02}・M_{07}は土間式なのである。したがって，吊脚楼と土間式住居をとくに区別して論ずる必要はないだろう。

次に，平面の分析に移ろう。調査した8棟のなかでは，3間タイプが3棟ともっとも多い（M_{01}・M_{06}・M_{07}）。ミャオ族の3間タイプも，トン族の3間タイプと同じく，〈左←中→右〉の序列性に支配されている。1例として凱里市西江鎮東引村のM_{01}をみると，中央に漢式「堂屋」風のzechoを置き，東西の脇間は2分割している。東側の1間は板敷きの前室を寝室（kachu），土間の後室をカマドを置く厨房（kasuo）とする。西側の1間は，板敷きの前室をイロリ部屋（kachidou），土間の後室を寝室とする。板敷きの1室をイロリ部屋，土間の1室をカマド部屋として，両者を共存させるところに，トン族にはみられない特徴がある。細かいところでは，イロリ部屋の片隅に配置される三脚付きの櫃（shike）や，「堂屋」の最前列に作り付けになる腰掛け（danka）などにも，ミャオ族の固有性が現れている。なお，M_{01}には，家父長夫妻を頂点として，3人の息子と1人の娘が同居している。息子のうちの2人はすでに妻をめとり，1組の夫婦には子供もいる。このようにM_{01}は，分家していない3組の夫婦のほか，全部で3世代9名の拡大家族によって構成されている。このうち，1階の2室を寝室とするのは家父長夫妻と長男一家であり，他のメンバーは2階の3室を寝室としている。トン族とはかなり異質な居住形態といえるだろう。

ところで，他の3間タイプ（M_{06}・M_{07}）も，M_{01}とほぼ同じ空間構成からなっているが，じつは2間タイプ（M_{03}・M_{08}），4間タイプ（M_{02}・M_{05}），5間タイプ（M_{04}）もすべて3間タイプの変型・応用とみてさしつかえない。すなわち，2間タイプは3間タイプの片側1間が省略された，より小規模世帯向きの平面であり，4～5間タイプは世帯の増員に対処するために，3間タイプを増築・拡張したものなのである。

たとえば，4間タイプのM_{05}をみてみよう。雷山県郎徳上寨のM_{05}は，戸主の1人である陳正清氏（インフォーマント＝ego）の祖父（FF）の代に，間口3間で建立されたが，父（F）と叔父（FyB）が分家する際に1間増築して，総間口4間とし，それを2間ずつ2戸に分割した。その後，叔父の所有した2間は，そのままかれの息子（FyBs＝egoの堂弟）に受け継がれたが，父の2間は陳氏とかれの弟の分家によってさらに2分割されている。

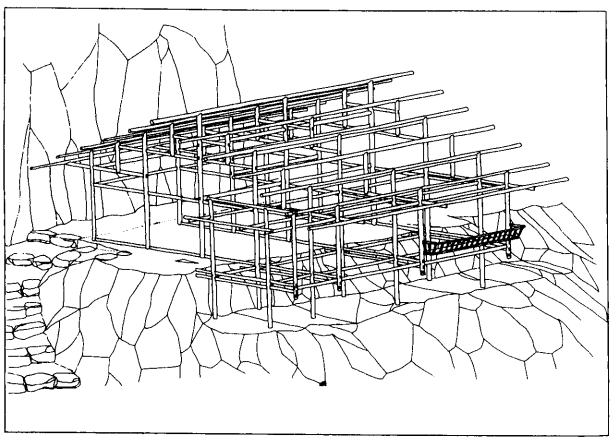

図29　M_{03}の構造アイソメ

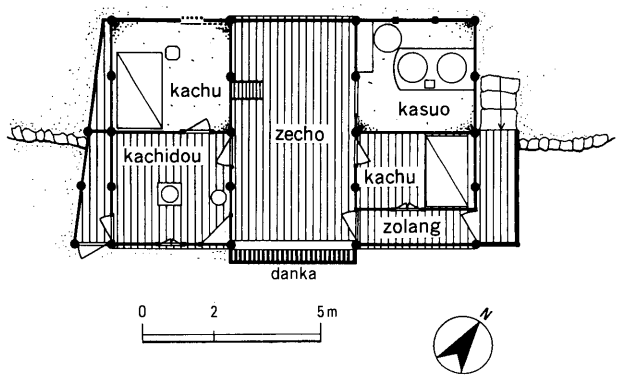

図30　M_{01}の平面

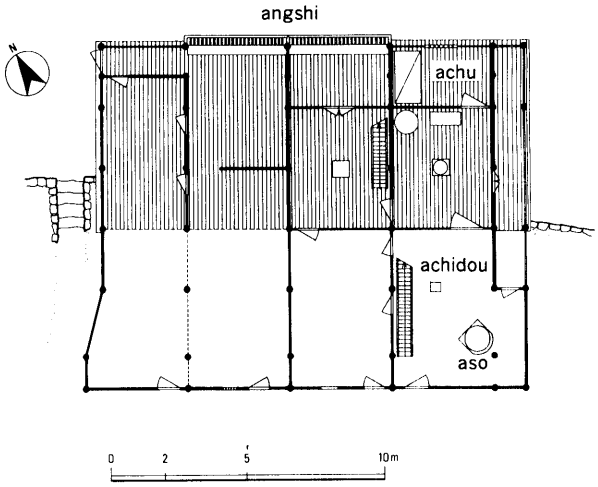

図31　M_{05}の平面

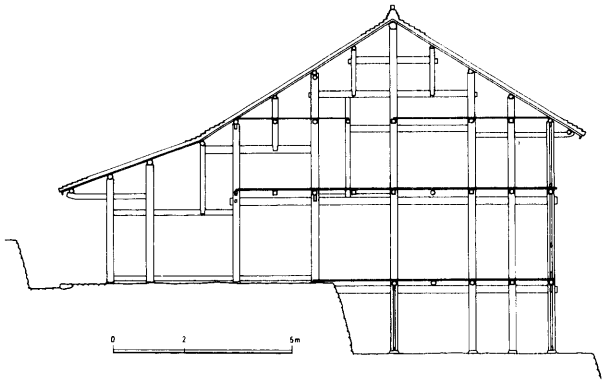

図32　M_{05}の断面

最後に，構法について述べよう。吊脚楼か土間式住居かを問わず，ミャオ族住居の架構は，トン族の穿闘式架構とほぼ変わるところがない。ただ，M_{01}・M_{02}・M_{05}・M_{06}・M_{08}では，側柱筋に垂花柱を用いず，入側筋や棟筋と同じく通し柱として，桁をうけている。また，柱の上端で，桁と貫をダブルで通す手法も，ミャオ族に特有の手法といえるかもしれない。ミャオ族の場合，穿闘式以外の架構法をみることはなかった。トン族の架構が，叉首式もしくは豕叉首式を祖型にする可能性をもつことからすれば，穿闘式の架構はむしろミャオからトンへ波及したものかもしれない。

3－2．プイ族の〈石の家〉

プイ（布依）族は，トン族やスイ族と同じ壮侗語族に属している。現在貴州では，貴陽市郊外の花渓区から黔南布依族苗族自治州にかけての一帯を中心に，約172万人のプイ族がいる[貴州省民族研究所　1980]。トン族と同じ語族であるにもかかわらず，プイ族の住居は，トン族の高床住居とはまったく異なったものだ。それは，家屋の全面，すなわち屋根・壁・床すべてに石板を用いた〈石の家〉なのである。ただし，このような〈石の家〉は，プイ族にのみ限定されるわけではない。建築材料としての石板を豊富に産出する地域では，漢族・ミャオ族にも共有されている。

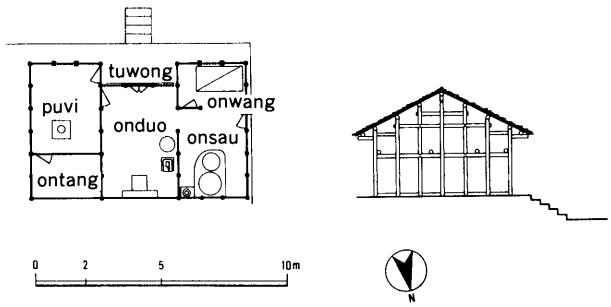

図33　P_{01}の平面（左）と側面（右）

貴州の山嶺に多産する岩石は，水成岩（石灰岩・白雲質灰岩）を主とする可溶性炭酸塩類の岩石に属し，以下のような3つの特徴がある。すなわち，①岩層が地表に露出し，②材質の硬度が適度で，③裂紋・裂隙によって岩石の分層がたやすいことである［羅 1983］。以上のような特性によって，建築材料としての石板（現地の漢語でいう「合棚石」）が，容易に得られるのだ。

調査では，花渓区の碧雲窩で，1棟だけプイ族の〈石の家〉を実測した（P_{01}）。P_{01}の平面は，やはり中央間（onduo）を漢式の「堂屋」風にする，対称3間タイプである。床は，高さ1mほどの基壇を築いて石板を張る。架構は穿闘式だが，桁をうける束の下にも2本の短柱をつないで，全体を通し柱風にする。江南風の表現を借用すれば，トンやミャオの架構は「減柱法」による穿闘式，プイのそれは「全柱落地」の穿闘式と呼び分けられるだろう。壁は，木舞を用いた真壁とする。しかし，このような土壁はむしろ例外的で，柱間に合わせて石板パネルをはめこむほうが一般的だ。住宅によっては，3.0×1.5mもの石板を用いる場合があるという。また，岩石を乱石積みにして外墻を築く住宅も少なくない。屋根は，垂木の上に，直接石板を葺く。P_{01}の場合，かなり乱雑に石板を重ね合わせている。このような葺き方以外にも，方形に整形した石板を菱状に規則正しく重ね合わせる手法もあるが，この方法は新しいスタイルらしい。なお，P_{01}については，すでに写真による簡単な紹介がある［戴 1984］。

3－3．漢族の住宅

漢族の住宅も，3棟実測した（H_{01}～H_{03}）。このうち，錦屏県城のH_{01}と鎮遠県城のH_{02}は，ともに三合院住宅。貴定県半辺街のH_{03}は，主屋と釜屋を別棟にした分棟型の住居である。いずれも興味深い事例だが，紙数の都合もあり，ここでは詳述を避けよう。ただ，この3棟の主屋（正房）がいずれも3間タイプの平面で，ミャオ族・トン族と共通する穿闘式構法を採用している点だけは強調しておきたい。

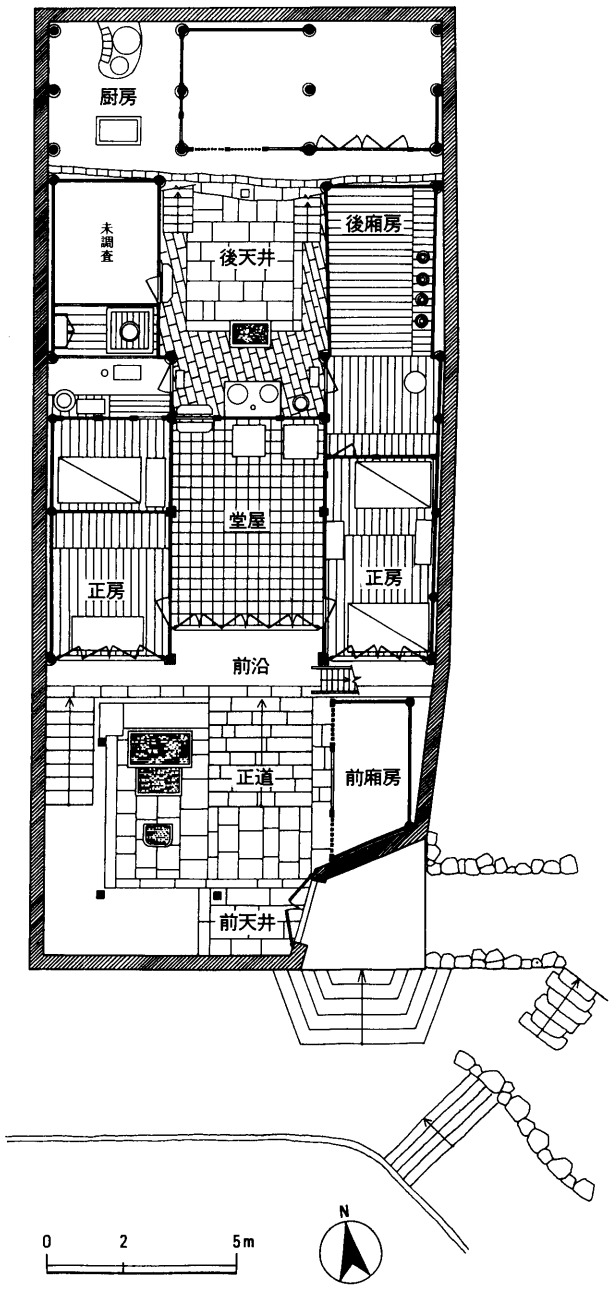

図34　H_{02}の平面

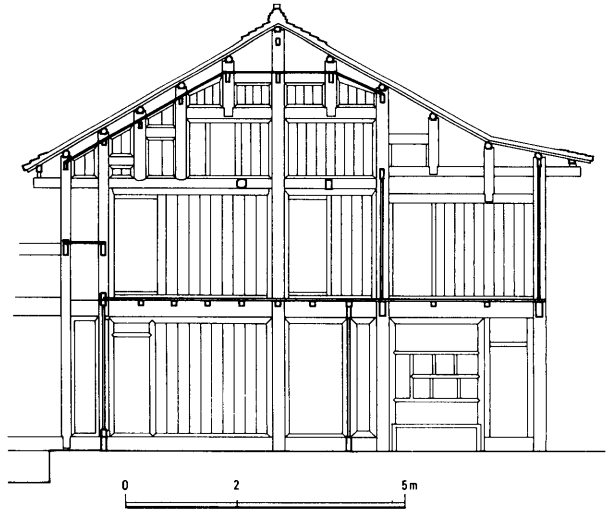

図35　H_{01}の断面（「堂屋」部分）

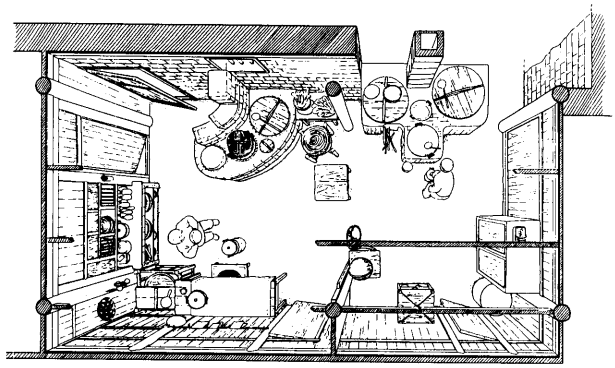

図36　H_{01}の台所パース

4．考察と展望

4－1．平面と架構の比較

以上に説明してきた諸民族の住居について，まずは平面と架構に焦点をしぼり，比較を試みてみよう。まず平面については，すでに鄧焱［1981］が，「堂屋」を中心に置く3間タイプを「苗・侗民居の典型平面」と結論づけている。たしかに本稿でも，〈左←中→右〉の序列性に統制された3間タイプの住居が，両民族に共有されることを述べたが，はたしてそれは住居の「典型平面」と呼びうるものであろうか。

ここで注目しなければならないのは，巨洞のようなトン族の僻地集落で，〈前→中→後〉の序列性をもつ平面が存在していることだ。問題は，この〈前→中→後〉と〈左←中→右〉というふたつの空間構成原理を，いかに位置づけるかということだろう。結論を述べてしまうなら，〈前→中→後〉のタイプは，トン族にとってのより古風な，したがって，より固有な「典型」平面であり，〈左←中→右〉のタイプは，漢文化の影響を受けた後の比較的新しい「典型」平面と解釈できるだろう。

架構についても，平面とほぼ同様の歴史的変遷が推定できる。すなわち，叉首式はトン族本来の様式，穿闘式は漢の技術を受容した後の様式とみなしうるのである。以上の結論は，仮説の域を出ないものかもしれないが，いちおうその根拠を，以下に示しておこう。

①より古風な文化をとどめる巨洞のような僻地集落に，〈前→中→後〉タイプの平面が普遍的であり，倉や住居の一部に叉首式架構が採用されている。

②トン族と同じ語族であり，なおかつ漢の影響をあまり受けていない海南島リー族や雲南タイ族の高床住居も，〈前→中→後〉タイプか，それに類似する平面をもち，叉首式架構が用いられている。

③〈左←中→右〉という空間の序列性は，古代以来，漢族の建築・都市全般に適用されてきた，空間分節の普

遍的な原理である。

④穿闘式の架構は，華南漢族の民間建築に多用される構法であり，現実に貴州でも H_{01}～H_{03}すべてに，この構法が採用されている。

⑤トン・ミャオ・プイの3民族が，類似する3間タイプの平面と穿闘式架構を共有する事実は，民族を超越した普遍性とはみなしにくく，ある時期以降に，より高次元の文化としての漢文化を受容した結果と解釈しうる。

というわけで，現段階では，〈前→中→後〉の序列性をもつ平面タイプと叉首式構法の複合した家屋をトン族本来の住居形式で，〈左←中→右〉の序列性に支配された平面と穿闘式構法の複合した家屋は，漢の文化・技術の影響下にあるより新しい住居形式ではないか，と考えている。もっとも，居住生活面としての「高床」や，イロリをめぐる居住様式などは，両者に共通して生き続けている。このように，住まいという物質文化の1レベルにおいても，文化交流による変動的な側面と，保守的・静態的な側面が同時に認められるのであり，今後はその重層性の解明に力が注がれるだろう。

4－2．「漢化」の諸側面

上にみたように，変動的なレベルにおいて貴州少数民族の住居を理解するには，漢族の文化・技術を媒介とする視点が不可欠であるように思われる。ここでは，住居・建築技術にかかわる漢文化の浸透について，さらにいくつかの覚書きを残しておこう。

①寸法体系：　トン族では確認できなかったが，ミャオ族ではすでに身体寸法が消失しており，丈・尺・寸による漢の尺法を用いていた。しかも，1（yi，a）と，8（ya，jei）を「吉利」とみなし，建築寸法に多用する習慣がある。たとえば，台江県掛定のミャオ族によると，棟木をうける「中柱」（gang nia dong）の寸法は，必ず1丈8尺8寸にするという。住宅の中心部材の寸法において，すべての単位に1と8を用いるのは，それが吉利のシンボルであり，とくに8が2回連続する「双八」が最高の吉祥だからだ。1と8を重視するこのような寸法体系は，明・清の民間工匠技術書『魯般営造正式』および『魯班経』にみえる「曲尺」（宋の百科全書『事林広記』にみえる「飛白尺」の系譜をひく）の体系を想起させる。すなわち「曲尺」では，1～9の数を9星と7色に対応させ，白星としての1・6・8を吉祥とみなすのである。ミャオ族の寸法体系は，おそらく，この曲尺の体系と系譜関係をもつものだろう。

②建築儀礼：　第1次調査を実施した1月は，ちょうど春節前の新築ラッシュの時期でもあり，ミャオ族住宅の建築過程を幾度か観察できた。そのなかで，加工や組立てのような技術面以上に注目されたのは，建築儀礼に用いられるいくつかの品物である。たとえば台江県排羊では，箸・銀・暦・筆・墨の5品を，杉皮と赤い布で2重にくるんで棟木の中央に巻き付けていた。箸は「食」，銀は「財」，暦は「時」，筆と墨は「文」を象徴し，「招来福寿保平安」のためのものという。箸・筆・墨などが漢起源の物質文化であるのはいうまでもないが，じっさいに鎮遠県城内の漢族住宅（H_{02}）でも，棟木に赤い布が巻き付けられていた。というわけで，棟木にかかわるミャオの儀礼も，やはり漢起源のものといえそうだ。また，建築中のミャオ族住宅には，「招来福寿保平安」などと七言で書かれた赤紙が，すべての柱にべったり貼りつけてあった。これも，漢式の祝い方であろう。

③風水・門神など：　風水思想もまた，少数民族に波及している。それが形となって現れているのは，錦屏県錦所村のトン族住宅（T_{12}）である。T_{12}では，床上の入口を柱筋にそろえず，柱筋から約30°ほど振った板壁面に設けている。このような「隅切り」に類似する開口部の回転移動は，不吉な方位を避けるために常用される風水の手法である。そして，注目すべきは，鎮遠県城内の漢族住宅（H_{02}）でも，ほぼ同じ手法が用いられていることだ。また，トン族・ミャオ族を問わず，門神を描いた貼り紙や春聯が門扉や門柱を飾る住宅も少なくない。これらも，すべて漢起源の習俗といえるだろう。

4－3．今後の展望

以上のように，今年度の調査では，断片的にではあるが，住居・集落にかかわる多彩な資料を収集することができた。また，貴州の関係諸機関との協力体制も確立し，

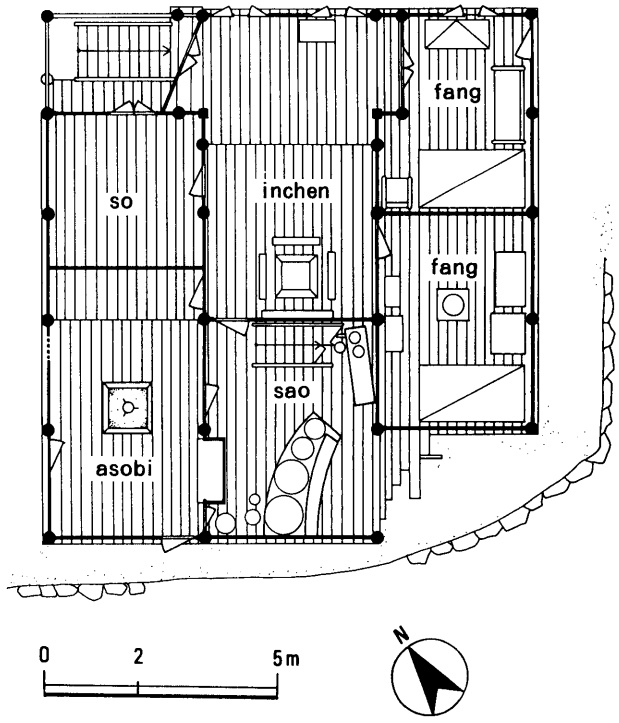

図37　T_{12}の床上平面

今後の継続的調査に明るい見通しを得ている。

具体的な構想では，今年度の調査がおもに家屋単体を対象としたので，来年度以降は集落レベルでの調査に主眼をおき，対象集落を１カ所に限定して，住み込みによる集中的な調査を実施することを考えている。調査地としては，群倉によってわれわれを圧倒した巨洞，もしくは巨洞に近接する都柳江流域の集落を最有力の候補として検討中である。いずれにせよ，トン族の高床集落を，物質文化・社会・宗教・文化交流などさまざまな側面からとらえ，より総合的な理解をめざしたいと思う。そのためには，言語学・民族学のスタッフを強化して，新たな調査にのぞむ必要があるだろう。

（文責：　浅川滋男）

〈参考文献〉

1．安　志敏，1963，「"干闌" 式建築的考古研究」『考古』２期
2．綾部恒雄(編)，1985，「民族とエスニシティ」『文化人類学』2，アカデミア出版会
3．百越民族史研究会(編)，1982，『百越民族史論集』，中国社会科学出版社
4．陳　春園，1985，「増衝鼓楼」『黔東南文物誌』第一集，黔東南州文化局
5．陳国強・蔣炳釗・呉錦吉・辛土成，1988，『百越民族史』，中国社会科学出版社
6．近森　正，1984，「住居の変化―オセアニア―」，杉本尚次(編)『日本のすまいの源流』，文化出版局
7．戴　復東，1984，「貴州岩石建築～我国建築百花園中的一朶鮮花」『建築師』20
8．戴　裔煊，1948，「干闌～西南中国原始住宅的研究」『嶺南大学西南社会経済研究所専刊』甲集第３種
9．鄧　焱，1981，「苗侗山寨考査」『建築師』9
10．《侗族簡史》編写組，1985，『侗族簡史』，貴州民族出版社
11．范　述波，1986，「者蒙花橋」『黔東南文物志』第二集，黔東南州文化局
12．貴州省民族研究所，1980，『貴州的少数民族』，貴州人民出版社
13．Heine＝Geldern R., 1923, "Südostasien", *Illustrierte Völkerkunde,* II
14．Heine＝Geldern R., 1932, "Urheimat und früheste Wanderungen der Austronesier", *Anthropos,* 27
15．胡　光華，1986，「肇興鼓楼」『黔東南文物志』第二集，黔東南州文化局
16．蔣炳釗・呉錦吉・辛土成（編），1988，『百越民族文化』，学林出版社
17．Lehman J., 1904, "Die Pfahlbauten der Gegenwart, ihre Verbreitung und genetische Entwicklung", *Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien,* 34
18．林　華東，1982，「試論河姆渡文化與古越族的関係」，百越民族史研究会（編）『百越民族史論集』，中国社会科学出版社
19．劉　放，1985，「車寨鼓楼」『黔東南文物誌』第一集，黔東南州文化局
20．羅　徳啓，1983，「石頭・建築・人　～従貴州石建築探討山地建築風格」『建築学報』11期
21．大林太良，1975，「住居の民族学的研究」，大林(編)『日本古代文化の探求　家』，社会思想社
22．大林太良，1984，「民族学からみた『すまいの比較・源流論』研究の問題点」，杉本尚次(編)『日本のすまいの源流』，文化出版局
23．潘　世雄，1987，「干欄考」，朱俊明(主編)『百越史研究』，貴州人民出版社
24．《黔東南苗族侗族自治州概況》編写組，1986，『黔東南苗族侗族自治州概況』，貴州人民出版社
25．朱　俊明（主編），1987，『百越史研究』，貴州人民出版社
26．呉　正光，1985，「"鼓楼文化"試探」，貴州省文管会弁公室・貴州省文化出版庁文物処『侗寨鼓楼研究』，貴州人民出版社

〈研究組織〉

主査	田中　淡	京都大学人文科学研究所助教授
委員	周　達生	国立民族学博物館助教授
	宮本長二郎	奈良国立文化財研究所建造物研究室長
	上野　邦一	奈良国立文化財研究所遺構調査室長
	浅川　滋男	奈良国立文化財研究所遺構調査室研究員
	郭　湖生	中国東南大学建築研究所教授（廈門大学建築系主任教授併任）
	楊　昌鳴	中国東南大学建築研究所博士研究生
協力者	羅　徳啓	中国貴州省建築設計院副院長
	譚　鴻賓	中国貴州省建築専科学校校長
	金　珏	中国貴州省建築専科学校副教授